

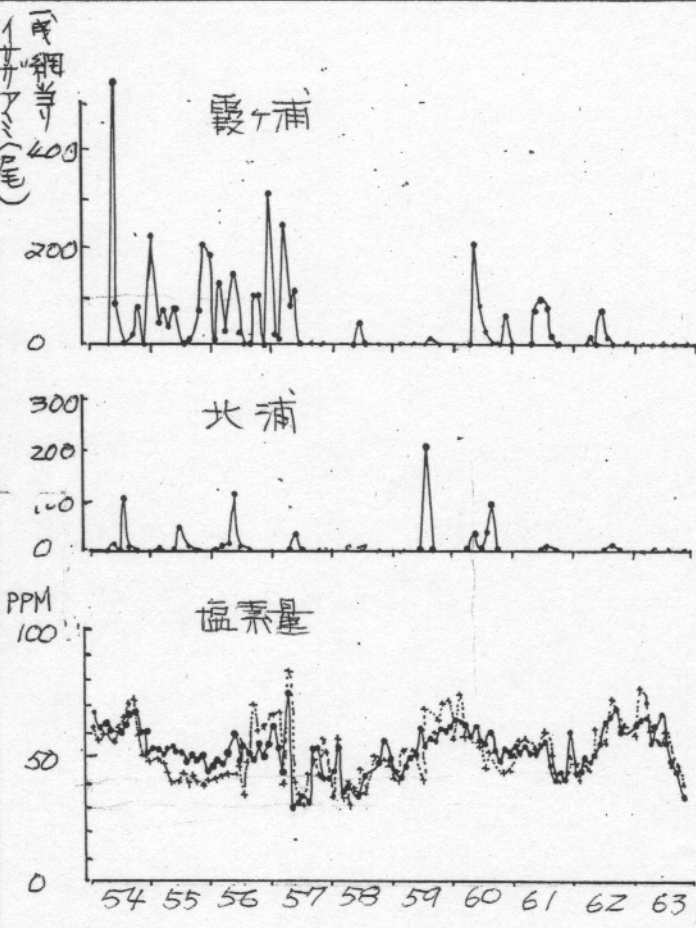
# 内水試 かわら版 99

イサザアミはどこへ行った

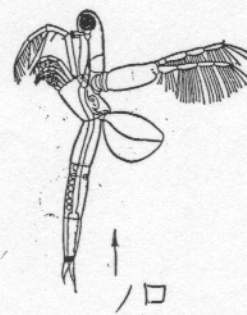
今年夏季に酸欠が発生しエビやハゼ類が死んだり、エビの出現が例年にくらべて1月もおくれたりして、漁業に大きな影響がありました。そうしたなかで、イサザアミの姿が見えないことも気になるところです。漁獲量は、霞ヶ浦と北浦では、若干、傾向が違いますが、最近減少気味で昭和59年には333トン、61年には697トンと1000トンを割っています。(かつては、1000〜20000トン程度はとれるのが普通でした)。

イサザアミは、霞ヶ浦北浦が海であった時代から棲息していた動

物で、海跡動物と言われているのです。したがって、生きて行くためには、ある程度の塩分が必要ではないかと言われています。かつては、諏訪湖や余呉湖といった淡水湖に霞ヶ浦のイサザアミが、移植されたことがあります。そこで増えていません。しかし、一方では、北海道の糖路湖(塩素量10PPM)のようにイサザアミの棲息がみられるところもあります。最近、私たちがおこなった調査の結果を図にしめました。その結果によれば、霞ヶ浦北浦の両湖で、最近イサザアミが少なくなっており、特に今年は皆無に近い状態でした。また、58年にも現存量がすくなくなっています。これを、塩素量の変化と比較してみると、どうも塩素量が30PPM近くまで下がったときに、姿を



かくしているようにみえます。イサザアミの生産を左右する要因としては、この他に餌となるプランクトンの種類や他の魚による捕食が考えられますが、淡水化が進むと出現するノロやハゼの仲間のヨシノボリが増えてきていることを考え合わせると塩素量の低下が



一番の原因と言えます。

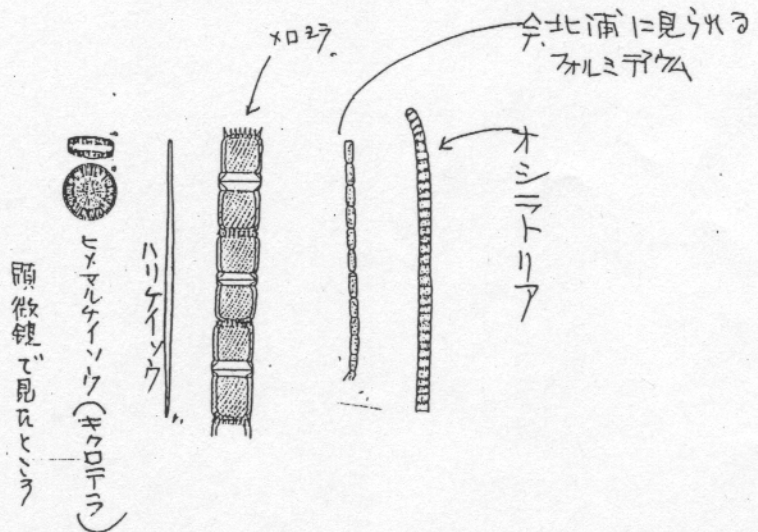
透明度、ただ今4メートル

高浜入りでは、12月に入り水が澄んで、底がよく見えます。カラスガイや空かんが、あちこちに散在しているようすが手にとるように分かります。高浜入り中央部で透明度を測ったところ底についた白色板が、かすかに見えました。この地点の水深は4メートルありますから、透明度は約4メートルといえます。

霞ヶ浦北浦の透明度の最も古い記録は、明治44年観測のもので沖宿の7尺1寸5分(2.4メートル)、掛崎の7尺7寸(2.9メートル)でした。一方、霞ヶ浦北浦の最高記録は昭和55年3月の5メートル(北浦、水原)で、この時は霞ヶ浦の麻生沖でも2.

メートルを記録しています。

さて、透明度が高まった原因ですが、それまで見られた植物プランクトンのオシロリアやキクロテラが枯死したことが、第一の原因ですが、夏季にアオコがすくなくったことが遠因となっていて、その内かもしれません。冬の水質の重要性については、かわら版93で述べたようにワカサギやシラウオなどの仔魚の餌の生産をどうして、その年の資源量を左右します。最近では、冬の水が緑色になればなるほどワカサギには都合が悪いと言う関係が認められていますから、冬の透明度が高いことは、来年のワカサギ資源には良い効果をもたらすかもしれません。これからの透明度や水質、ワカサギ資源の動向を注意深く追跡する必要があります。



項目	霞ヶ浦 (三又沖)				(北浦 白浜沖)			
	9/5	9/19	10/12	10/31	9/5	9/19	10/12	10/31
水温	25.4	23.4	19.4	15	25.9	23.8	19.9	15.4
透明度	100	88	55	50	120	110	130	135
酸素	7.2	13	11.6	10.8	7.1	9.7	9.6	11.2
pH	7.9	9.3	9.2	9.2	7.9	8.6	8.3	8.3
窒素	1.19	1.84	1.62	1.9	0.99	1.54	1.34	1.78
リン	0.076	0.102	0.102	0.102	0.078	0.059	0.054	0.062
クロロフィ	69.4	117	118	176.5	144.8	14.6	60.9	122.3
COD	8.5	11.1	10.4	12.7	6.8	8.8	7.2	7.3